

大きな字で読みやすい

浄土真宗 やわらか法話 1

やわらか法話・目次

「さよなら」のない出会い	〔松月博宣〕	6
お浄土をいただいで生きる	〔内田正祥〕	15
深きお慈悲に育てられて	〔野村康治〕	23
お慈悲の中で	〔井上恒夫〕	33
お念仏のところにふれて	〔貴島信行〕	41
見方、考え方、味わい方	〔藤実無極〕	51
激流の中で	〔大田利生〕	60
今日ただ今のお救い	〔高田慈昭〕	69
一生しあわせになりたければ……	〔稲田静真〕	77
生死いずべき道とは	〔高田興芳〕	86
過去帳って何？	〔義本弘導〕	94
悲しみに寄り添うとは？	〔竹田嘉巴〕	102

「さよなら」のない出会い

まつづきはくせん
松月博宣(福岡県・海徳寺住職)

元旦、たくさんの方と年賀状の交換をいたします。

中には年に一度、年賀状のみでのお付き合いという方もありますが、それでも一枚一枚に、くださった方の近況を知り、お互いの無事を確認し合うことができうれしいものです。最近流行の携帯メールでは味わえない温もりを感じることができます。今年もまた

新たなたくさんの方との出会いがあることでしよう。

さて、人生は人との出会い、そして別れの繰り返しといえます。人間が一生の間に出会う人の数は、何らかの接点を持つ人が一人。そのうち同じ学校、同じ職場、近所という近い関係が千人。さらにそのうち親しく会話を持つのが百人。友人と呼べるのが三十人。親友と呼べるのが三人。という数字を何かの本で読んだ記憶があります。これは当然個人差がありましようが、興味ある数値ではあります。

年賀状を交換する方々は、右の数字の千人中のいかほどでしょうか。そのうち親しく会話を持つ人を仮に百人として、その中で

「本当に出会えた」といえる人は一体何人になるのでしょうか。

「本当の出会いというのが、嘘の出会いがあるのか？」とお叱りを受けるかもしれませんが、一昨年相次いで先立たれた先輩方との別れを通して、実に温もりのある「別れ方」があるものだということを経験しました。その経験を通して、私たちはともすれば「さよなら」をする出会いになってしまっているのではないかと思わずにはいられなかったのです。

「会うは別れの始め」という言葉があるように、私たちは死ということをはじめ、必ず別れを経験しなければなりません。しかし、同じ別れでも「さよなら」ではなく「またお会いできますね」、あ

るいは「お待ちしております」という別れも確かに存在するのです。私の先輩で五十五歳のUさんは一昨年すいごうの十一月八日、臍臓すいぞうがんでお亡くなりになりました。その前夜、病床を見舞うことができ、これが最後とお互いわかっておりますから、実に濃密な時間を過ごすことになりました。

病室を辞す時、今までのご交情にお礼を申した私にUさんは握手を求められ、「君、身体を大切にね。また会って話したいね。でも、もう無理だろうなあ……。でも、また会えるもんね」と、もうこれ以上ながらえない、と自らの病状をそのまま受け容れた落ち着いた声でおっしゃいます。Uさんの心中が痛いほど感じられ「は